

也條々聞書に、御供の衆もみのをめし候とあり、かつばと云ふ詞は阿蘭陀の詞也、阿蘭陀の人の上に著る衣服にかつばと云ふ物あり、その形をまねて作りたるを坊主合羽と云、始は是れをか

つばと云ひしが、後に袖を付けたる合羽を作り出して、始のをばぼうづがつばと云也、

〔嬉遊笑覽二上一〕合羽といふ物は、古代なきものなり、昔は蓑を著たりと云は、一わたりの説なり、古

へその物なきにあらず、略○今の合羽は、慶長の頃、紅毛人の衣服、袖もなく、裾ひろきカツバとい

へる物を學びて紙にて作り、油ひきて、カツバと名付く、今の坊主合羽といふ物なり、其後また油

をひき、袖を付たる紙カツバ出來て、又木綿羅紗等の合羽は出來るなりと、四季草にいへるは誤

りなり、木綿等のカツバは、もと道服より起る、古畫に、今の木綿合羽の如きもの著たるかたあり、是道服なり、後これを雨羽織ともいへり、略○中然るを其服蠻人のカツバに似たれば、是をもカ

ツバと呼て、雨はふりの名は隠れたるにや、紙にて作れる袖なきは、元よりカツバと云しものに

て後の物なり、紅毛の國の書をよむ人に聞しに、カツバはホルトガルの詞にて、紅毛には是をヤ

スといふ、ホルトガルは爰に通信玄たることはやく、和蘭の來らざる前にありしかば、其國の詞

今に遺りたるが多し、ボタンがけのボタンといふ物も、彼カツバに付たるビユタンといひし物

を、訛りてボタンといふなり、是もホルトガル詞なりとぞ、東雅にボタンとは、西洋拂郎機國の方

〔本朝世事談綺正誤器用一〕合羽

按に、采覽異言曰、喞蘭地篇云、又披皂縵如靶爲莊服、猶浮屠著僧伽黎、笠ヲ云フウツト、上衣云ニマン

此間雨衣蓋也、鈴錄曰、合羽雨衣具也ト云コトハ、元來阿蘭陀詞ニテ、阿蘭人ノ衣服ヲ云、雨衣ヲカツバノ

如ク拵タルユヘ、カツバト云、安齋隨筆赤鳥卷曰、今世バウズガツバト云モノ其始也云々、合羽ト

書ハアテ字也など、くさく見えて、蠻語なるやうなれどさにはあらず、再按に、節用集大空卷の

二、加の部曰、紙羽註云、雨衣也、即紙羽織之略語、例如略紙小袖而言紙小とあるにて思へば、毛吹草